

春に白い花が咲く「希少糖の木」 — ズイナ（瑞菜・髓菜）のすべて

日本固有の落葉低木が秘める、
歴史的価値と現代科学の交差点

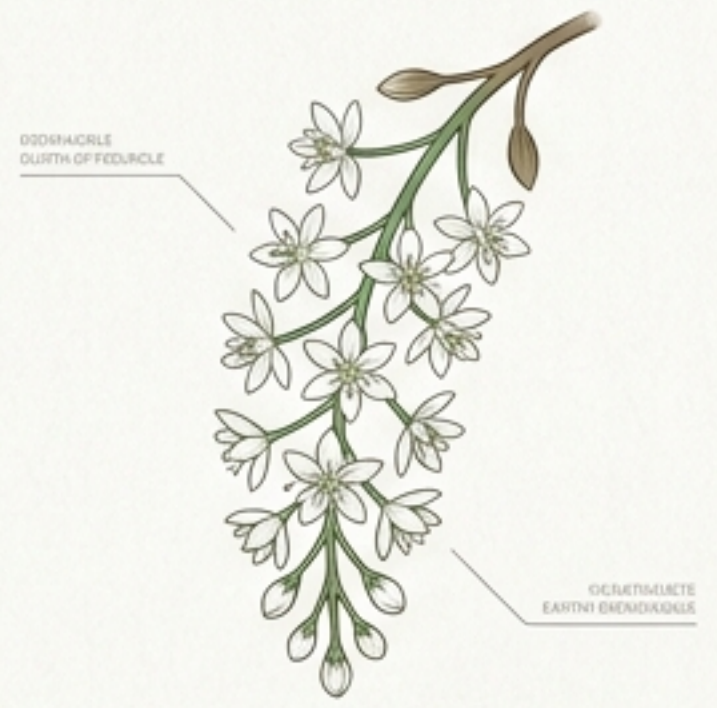


ズイナ（瑞菜）の基本プロフィール



日本固有種

紀伊半島以南の山地にのみ自生する貴重な固有種。



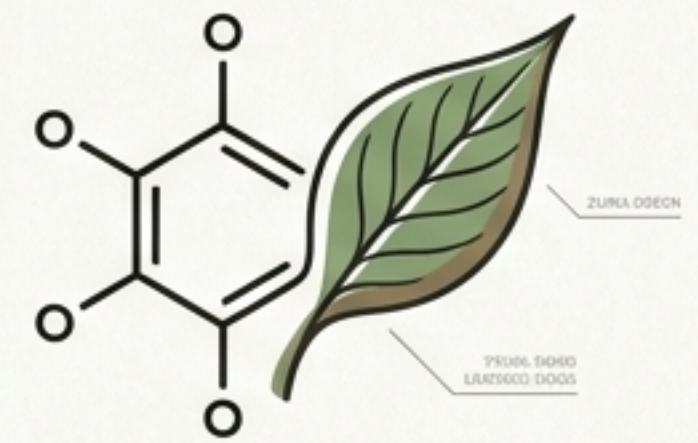
初夏の白い花

5～6月に穂状花序で無数の小さな白い花を咲かせる。



人間との関わり

灯火の芯や山菜として、古くから人々の生活を支えてきた。



希少糖の木

希少糖「D-プシコース」を含む世界で唯一の樹木。

分類と原産地：南日本の山地帯に息づく固有種



ユキノシタ科 (Saxifragaceae)

ズイナ属 (Itea)

落葉低木 (Deciduous shrub)

Itea japonica Oliv.

英名：Japanese sweetspire

名前の由来：「髓」と「菜」が示す歴史的利用



「髓 (Zui)」

枝の髓（ずい）を灯火の芯として利用した歴史。

+



「菜 (Na)」

若い葉を山菜として食用にした歴史。

= ズイナ（瑞菜・髓菜）

別名：ヨメナノキ（姪菜木、嫁菜木）
山菜のヨメナと同様に、若葉が美味しく食べられることに由来する。

春の開花：枝先を彩る「総状花序」

毎年5月～6月にかけて、鮮やかな緑色の枝の先に、
無数の小さな白い花をつけます。

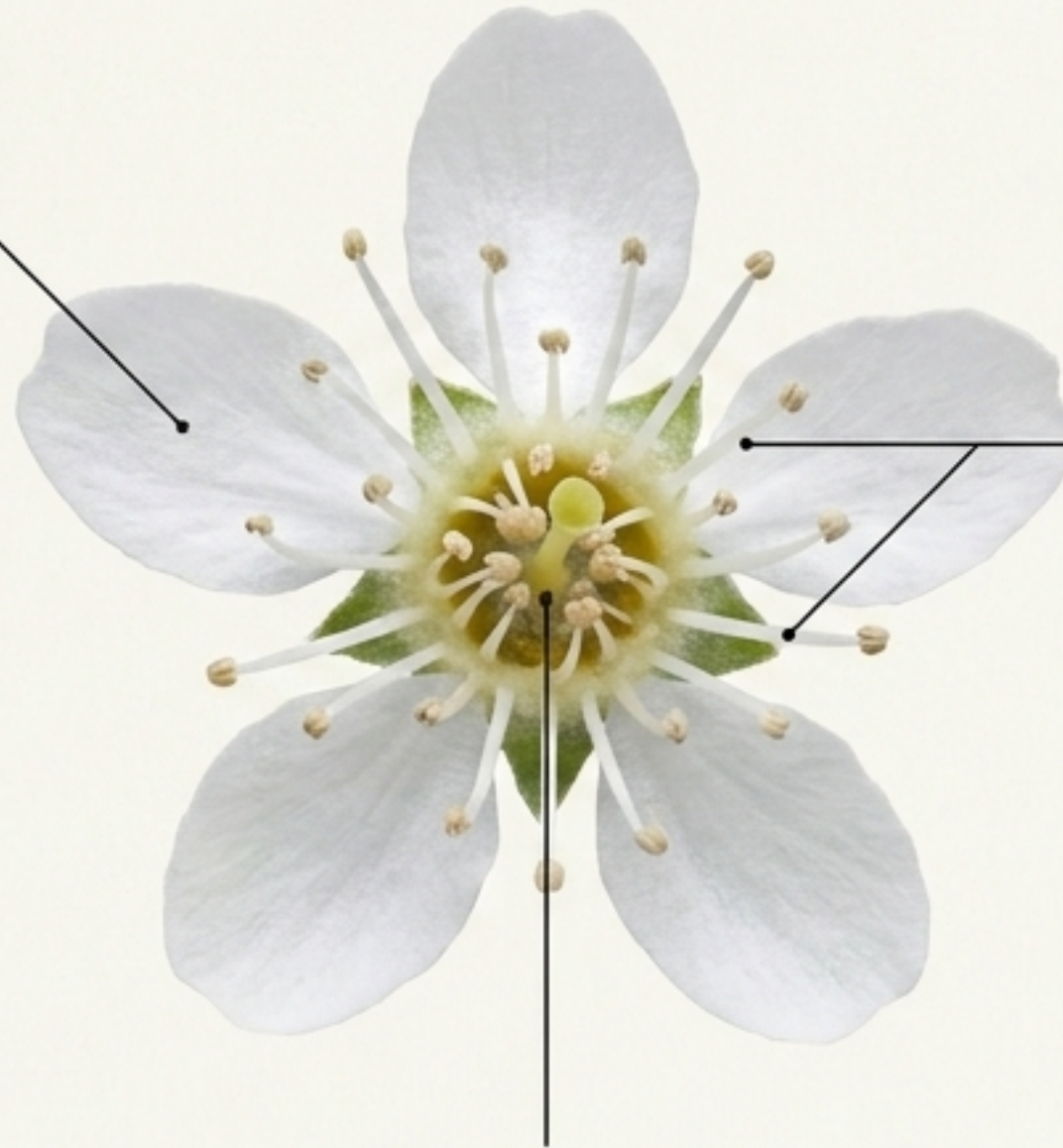
【総状花序（そうじょうかじょ）】
長い柄（中心の軸）に沿って、小さな
花が多数連なって咲く花のつき方。小
さな薔樹（樹高1～3m）でありながら、
多数の花序をつけるため非常に見応え
がある。



花のミクロ解剖：極小の花に詰まった構造

花びら5枚

白く繊細な花弁が星のように開く。



雄しべ5～6個

花びらの間から放射状に伸びる。

中心の雌しべ

花の中心に1つ鎮座する。

樹の特徴：緑の枝と特徴的な葉

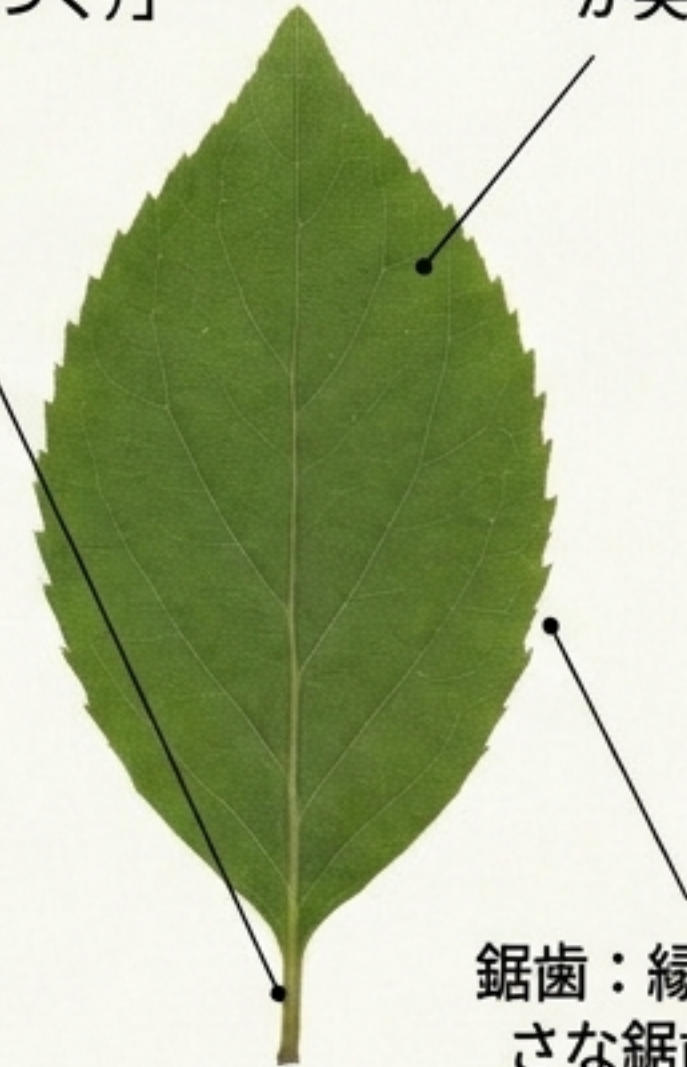
【一年目の若い枝】

クロモジのように鮮やかな「緑色」をしているのが最大の特徴であり、他種との強力な識別ポイントとなる。



葉柄：短い葉柄で枝に「互生（交互につく）」する。

形状：卵形で先端が尖る。



鋸歯：縁には不規則で小さな鋸歯（ギザギザ）が見られる。

幹と果実：成熟のプロセス



【樹木と幹】

樹高：1～3mの小ぶりの落葉低木。

幹：直径は10cm前後。若い枝（緑色）とは対照的に、成熟した幹は落ち着いた茶褐色をしている。



【果実と種子】

果実：広卵形の蒴果（さくか）。熟すと縦の溝に沿ってきれいに割れる。

種子：非常に小さく黒色。表面には微細な網目模様が刻まれている。

人間との関わり：日々の糧から最先端の園芸へ



昔の生活を支える実用植物：
枝の髄は室内の明かりを灯す芯として重宝され、若葉は貴重な食料（山菜）として人々の飢えを凌いだ。



現代の園芸・研究対象へ：
現在は香川県園芸総合センターなどで栽培・研究が進められており、単なる野生の低木から、特別な価値を持つ栽培樹木へと進化している。

現代の驚異：世界で唯一の「希少糖の木」

自然界に極めて少量しか存在しない単糖「希少糖 (Rare Sugar)」。

ズイナは、希少糖
「D-プシコース」を
含有する唯一の
樹木である。

この特異な性質により、近年では「希少糖の木」として新たな脚光を浴びている。

数ある植物の中でも、このD-プシコースを含んでいる樹木はズイナしか確認されていない。

近縁種との識別マトリクス（見分け方）

	ズイナ	リョウブ	コバノズイナ
樹皮・幹	茶褐色	平滑で独特のまだら模様	-
葉の形	卵形で先が尖る	-	細長い倒卵形～楕円形
葉の縁/鋸歯	不規則で小さな鋸歯	-	細かな鋸歯がつく

【識別のポイント】

リョウブは「幹の模様」で、コバノズイナは「葉の細長さと細かい鋸歯」でズイナと明確に区別できる。

まとめ：過去と未来を繋ぐ日本の至宝

1. 識別: 春には白い総状花序を垂らし、若い緑色の枝で静かに山地を彩る。
2. 歴史: 灯火や食料として、古来より人々の営みと密接に関わってきた。
3. 未来: 「希少糖の木」として、現代科学において唯一無二の価値を示している。

ズイナ自身の花言葉は不明ですが、近縁のコバノズイナには「少し欲望」という花言葉が与えられています。未知のポテンシャルを秘めたこの樹にふさわしい、静かな情熱を感じさせます。